

ゴマーや配位性高分子等を含む物質群として広く捉え直し、関連研究を行う学生や若手研究者を対象に若手の学校を開催してきた。

今年度は、分子性導体分野の代表的な国際会議である International Symposium on Crystalline Organic Metals, Superconductors and Magnets (ISCOM2025) が国内で開催されることから、例年の国内向け若手の学校ではなく、ISCOM2025のプレカンファレンスとして、若手国際ワークショップ YSCOM2025 を開催する運びとなった。ワークショップには計34名の若手研究者が参加し、その過半数が大学院生であった。期間中は、海外からの口頭講演2件を含む口頭講演20件(うち、大学院生の口頭発表9件) およびポ

スター発表13件を行い、会場では連日白熱した議論が交わされた。懇親会でも多くの参加者が交流を深め、国内外の異分野の若手研究者同士に濃密な学術交流の機会を提供できた極めて有意義な若手ワークショップとなった。

最後に、本ワークショップは分子研研究会の支援を受けて開催させて頂い

た。分子科学研究所の山本浩史教授および山本グループスタッフの皆様、また世話人を務めてくださった杉浦菜理助教(東北大金研)、横森創助教(茨城大)、今城周作准教授(東大)をはじめ、本ワークショップ趣旨に賛同、ご参加頂いた全ての皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げる。



分子研研究会「2050年の生体分子科学を語る」

報告：協奏分子システム研究センター 秋山 修志

去る2025年10月21～22日、分子研研究会「2050年の生体分子科学を語る」が開催された。かつて分子研教授として北川禎三先生(故人)が中心的な役割を果たされた分子研研究会「2010年の分子科学を語る(1998.10/19～21)」を参考に、5名の世話人(神取秀樹教授@名工大、水谷泰久教授@阪大、石森浩

一郎教授@北大、飯野亮太教授@分子研、筆者[秋山修志]@分子研)で本研究会の企画・準備を進めた。

本研究会は一般的な研究発表の場ではなく、各演者が未来(25年後)の夢を語り、そこにシニアや若手の研究者が加わって「2050年の生体分子科学をみんなで語る」ことを目的とした場

である。よって本研究会の招待講演者については、まず生体分子科学コミュニティを牽引してきたシニア世代に候補者の推薦を依頼し、そこから25年後も現役(語った夢の実現可否を独自に検証し得る)であろうことが見込まれる35～40歳前後の世代を中心に18名を選考した。

講演者リスト(継承略)

八木 清(筑波大)
井上圭一(東大)
柴田幹大(金沢大)

北岸宏亮(同志社大)
大洞光司(阪大)
庄司光男(筑波大)

近藤 徹(基生研)
梶本真司(東北大)
田村朋則(京大)

森 俊文(九大)
小杉貴洋(分子研)
新津 藍(理研)

梁取いずみ(京大)
森本祐麻(東京科大)
堀谷正樹(佐賀大)

齋尾智英(徳島大)
片山耕大(名工大)
大友章裕(京大)

詳細は <https://www.ims.ac.jp/research/seminar/images/bms2050.pdf>



NMR、EPR、蛍光、赤外、ラマン、高速AFMなどの計測技術を武器とする研究者、生体無機化学やケミカルバイオロジー分野の研究者、そして理論化学計算や生体分子デザインを駆使する研究者を含む錚々たるメンバーである。語られた「夢」の詳細に立ち入ることはしないが、目前の課題を一つ一つ解決して達成する「積み上げ型の夢」、今の技術や知識では達成できないゴールを設定してそこからの発想を促す「逆算思考型の夢」など、各演者の個性や経験が反映された魅力的な「夢」で溢れる素晴らしい場となった。

また、初日の後半では、パネリスト(古賀信康教授@阪大、伊東忍教授@阪大、水谷泰久教授@阪大、石森浩一郎教授@北大)からの話題提供をもとに、「2050年の生体分子科学をみんなで語る」と題した総合討論を実施した。議論の方向性がやや広い範囲に及んだ気もするが、会場の皆さんが討論に加わってくださるかという主催者側の不安をよそに、予定を大幅に超過してしまう

ほどの盛況ぶりであった。

25年後、著者は77歳になっている。2050年時の定年が今と同じ65歳であるかどうかはわからないが、ほぼ間違いなく分子研を定年退職している(それまで在籍して居れば)。運に恵まれて健康に過ごすことができれば、本研究会で語られた「夢」のゆくえを18名の招待講演者とともに語らいつつ、次の世代の「夢」に触れることができるかもしれない。生体分子科学コミュニティ

の諸先輩方から託された課題や夢を次の世代に繋いでいくことの大切さを改めて認識する貴重な機会であった。

最後に、本研究会の開催にあたって協力頂いた、古池美彦博士(分子研)、堀内滉太博士(分子研)、尾上靖宏博士(分子研)、近藤貫太氏(総研大生)、鈴木博子氏(分子研・グループ秘書)、小倉康子氏(分子研・戦略室)、ならびにその他の分子研関係者にこの場をお借りして感謝申し上げたい。



UVSORシンポジウム 2025

報告：極端紫外光研究施設 平 義隆

2025年10月30日～31日に岡崎コンファレンスセンターにおいてUVSORシンポジウム2025が開催されました^[1]。開催形態は今年も現地とオンラインのハイブリッドとしました。本シンポジウムでは、UVSORや他の放射光施設を用いた最新の成果発表が行われ、ポスター発表や情報交換会を通じた情報共有と意見交換が行われます。参加者は、現地参加が86名、オンライン参加が17名でした。発表件数は、招待講演3件(台湾大学 野口様、高輝度光科学研究センター 池本様、広

島大学 和田様)、口頭6件、ポスター37件でした。招待講演では、角度分解光電子分光を用いた電子状態測定やUVSOR赤外ビームラインの現状、光渦のヤングの二重スリット実験に関する研究成果が発表されました。放射光施設では複数のビームラインにおいて同時に実験が行われますが、普段のビームタイムでは自らの実験を実施することに精一杯で隣は何をする人ぞ、のような状況になると思います。UVSORシンポジウムは、実験ホールやユーザー控室ですれ違ったことのある研究者が

どのような実験を行っているのかを知る貴重な機会です。これまで参加したことのないユーザーの皆様は、是非一度参加してみてください。新しい研究アイデアを思いつく良い機会になるかもしれません。

本シンポジウムでは、学生(学部、修士、博士)の発表を対象に最優秀学生発表賞の選考も行われました。23件のポスター発表と3件の口頭発表から以下3件の発表が選ばれ、UVSOR利用者懇談会の伊藤会長(名古屋大学)より賞状と記念品が授与されました^[2]。